

五時に分、或時は二藏と判ぜり。(然りと雖も) 竜樹菩薩造 百論・中論・十二門論・大論を尊で般  
 若經を依憑と定給、天台大師を辺執して過給し程に、智者大師の梵網等の疏を見て少心とけ、やうや  
 う近て法門を聴聞せし程に、結句は一百余人弟子を捨、般若經並に法華經をも(講ぜず)、七年、至で天  
 台大師に仕えさせ給き。高僧伝には「衆散身を肉橋と成す」と書かれたり。天台大師高坐に登給えは  
 寄て肩を足に備え、路を行給えは負奉給て堀を越給き。吉藏大師程の人だにも謗法ををそれてかくこ  
 そつかえ給しか。而を真言・三論・法相等の宗宗の人々、今すへぐに成て辺執せさせ給うは自業自  
 得果なるべし。今の世に浄土宗・禅宗など申宗宗者、天台宗にをとされし真言・華嚴等に(及ぶべか  
 らず)。依經既に楞伽經・觀經等也。此等の經經は仏の出世の本意にも非ず、一時一會の小經也。一  
 代聖教を判に(及ばず)。而彼經經を依經として一代の聖教を聖道浄土・難行易行・雜行正行に  
 分、教外別伝なむどのゝしる。譬ば民が王をしえたげ、小河の大海を納が如し。かかる謗法の人師共を  
 信て後生を願人人は無間地獄(脱るべきや)。  
 然者当世の愚者は、仏には釈迦牟尼仏を本尊と定めれば自然に不孝の罪脱かれ、法華經を信ぬれば不慮  
 に謗法の科を脱たり。其上女人は五障三従と申て、世間・出世に嫌、一代の聖教に(捨てられ畢んぬ)。  
 唯法華經計にこそ童女が(仏に成り)、諸尼の記前はさづけられて候ぬれば、一切の女人は此經を捨させ  
 給ては何の經をか持せ給べき。天台大師者震旦国人、仏滅後一千五百余年に仏の御使として世に出させ  
 給き。法華經に三十卷の文を注給、文句と申文の第七卷には(他經には但男に記して女に記せず)等云云。

男子も余経にては仏に（成らざれ）ども、且与て其をば許てむ。（女人に於ては一向諸経に於ては叶うべからずと書かれて候）。縦令千万の経経に女人（成るべし）と（許され為りと雖も）、法華經に嫌なば何の憑か（有るべきや）。教主釈尊我諸経四十余年の経経を未顕真実と悔返、涅槃経等をば当説と嫌給、無量義経をば今説と定め、三説にひでたる法花経に（正直に方便を捨てて、但無上道を説く。世尊は法久しうして後、要ず当に真実を説きたまうべし）と釈尊宣給しかば、宝上世界の多宝仏は大地より出させ給て真実なる由の証明を加、十方分身の諸仏は広長舌を梵天に付給。十方世界微塵数の諸仏の御舌は、不妄語戒の力に酬て八葉の赤蓮花にをいでさせ給き。一仏・二仏・三仏乃至十仏・百仏・千万億仏、四百万億那由他の世界に充滿せりし仏の御舌をもつて定をき給える女人成仏の義也。謗法無くして此経を持女人は、十方虚空に充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十惡・五逆なりとも、草木の露の大風にあえるなる可。三冬の氷の夏の日に滅が如し。但（滅し難き者）は法華經謗法の罪也。譬ば三千大千世界の草木を薪と為とも、須弥山は一分も（損じ難し）。縦令七日出て百千日照とも、大海の中をばかわかしがたし。設八万聖教を讀、大地微塵の塔婆を立、大小乗の戒行を尽、十方世界の衆生を一子の如くに為すとも、法華經謗法の罪はきゆべからず。我等過去・現在・未來の三世の間に仏に（成らずして）六道の苦を受けるは、偏に法華經誹謗の罪なるべし。女人と生て百惡身に備ふるも、根本此經誹謗の罪より起れり。然者此経に値奉らむ女人は、皮をはいで紙と為し、血を切てすみとし、骨を折て筆とし、血のなんだを硯水としてかきたてまつるとも、あくごあるべからず。何況衣服・金銀・牛馬・田畠等